

「草食系男子」はなぜ蔑称化したのか

—男女平等フォビアの視点から—

澁 谷 知 美

要 旨

本稿の課題は、「草食系男子（草食男子）」はなぜ蔑称化したのか、を明らかにすることである。具体的には、「草食系男子」の蔑称化の背景には日本社会の男女平等にたいする嫌悪（男女平等フォビア）があった」という仮説を立て、その当否を検証する。男女平等フォビアとは、①女性が引受けてきた役割を男性が引き受けることへの忌避感、②女性的な特質を有する男性への「不自然」という非難、の総称である。方法として、2009年に刊行された雑誌記事の言説のうち草食系男子を批判するものを言説分析した。その結果、仮説は肯定されることが確認できた。草食系男子は恋愛に受け身であることにされたうえ、男性役割を果たしていないとして論難されていた。また、草食系男子の性行動が「不自然」とあるとの指摘がなされていた。そのうえで、次の示唆を得た。第一に、日本社会における男女平等フォビアは根深いことである。第二に、草食系男子否定に対抗するために、彼らが既存の社会システムに「順応」「適応」しているというロジックが使えるということである。

1 本研究の課題

本稿の課題は、「草食系男子」はなぜ蔑称化したのか、を明らかにすることである。具体的には、「草食系男子」の蔑称化の背景には日本社会の男女平等にたいする嫌悪（男女平等フォビア）があった」という仮説を立て、その当否を検証する。方法として、2009年に刊行された雑誌記事を用いた言説分析を採用する。以下では、特に断りがなければ、「草食男子」と「草食系男子」を同一概念とみなしたうえで「草食系男子」の用語を用いる。

はじめに、「草食男子」の定義を確認しておく。「草食男子」とは、「モテないわけではないが恋愛やセックスにがががつかない」などの特徴を持つ「団塊ジュニア世代」の男性のことである（深澤2006）。この言葉は、コラムニストの深澤真紀が2006年10月に日経ビジネスオンラインでの連載「U35 マーケティング図鑑」第5回で使用したのを嚆矢とする。この世代の男性には「上の世代の男たちのように女性差別的な人が少ない」という実感が当時の深澤にはあり、そうした側面を肯定的に取り上げたいという動機に基づくものであった

「草食系男子」はなぜ蔑称化したのか

(深澤 2019: 46)。

次に、「蔑称化」がいかなる現象を指しているのかを説明する。当時の関係者は、深澤を含めて誰一人「草食男子」が流行するとは思っていなかったが(深澤 2009)、「草食男子」「草食系男子」概念はまたたく間に広がり、2009年の「新語・流行語大賞」を受賞するに至る。しかし、後に見るように、この頃にはすでに「草食系男子」はネガティブなニュアンスをまとった「恋愛や結婚に臆病な男性」の意味で使われており、当初の定義とはまったく逆に、「男尊女卑志向を持ち、異性とコミュニケーションができない男性」として語られることすらあった。長じて少子化の原因として位置づけられたり、消費行動に消極的であるとの解釈がなされ、不景気の原因として位置づけられたりもした。「草食系男子」にたいするバッシングのなかで、同概念は蔑称と化していった。

仮説の出所について説明する。「草食系男子」の蔑称化の背景には、日本社会の男女平等にたいする嫌悪(男女平等フォビア)があったと考えられるのはなぜか。この仮説の理論的支柱として、アメリカにおけるメトロセクシュアル(Metrosexual)研究の成果がある。メトロセクシュアルとは、一般的には「ファッションやショッピングに関心のある異性愛男性」と定義される(“*Oxford Learners' Dictionaries*”)。「ファッションやショッピング」という言葉に表現されるように、メトロセクシュアルは消費行動にフォーカスした概念である。さらに、それらの消費行動の担い手が、じゅうらいは女性やゲイ男性に特化していると考えられていたことをふまえ、あえて「異性愛男性」であることが強調される傾向がある。

だが、テキストや広告表象の分析によってメトロセクシュアルの特徴を整理したデヴィッド・コードは、ヘテロ男性による新たな消費行動の登場以上の意義をこの概念に見いだす。すなわち、メトロセクシュアル概念には、男性と女性というジェンダーの境界、ヘテロとゲイという性的指向性の境界を瓦解させる作用があるという(Coad 2008: 197-8)。たとえば、メトロセクシュアル性を体現しているとコードが見なすハイブランドによる男性用下着の広告には、男らしい肉体を誇るスポーツ選手がモデルとしてしばしば起用される。それらの広告のビジュアルは、下着に付着した「女やゲイのもの」というコノテーションを下着から引き離し、「男のもの」に着地させ、男性自身の身体の見え方を変える効果があるという。ボクサーパンツやブリーフを履いたスポーツ選手を載せた広告はあちこちに偏在しながら、すべての男性たちに、男ものの下着が醸し出すエロスを愉しみ、魅惑的であるとはどういうことかを理解し、見られることに快感を見いだすよう促す(ibid: 116)。つまり、これまで女性やゲイの役割であった「見られる対象になる」、「身体にエロスを見いだされる」可能性をヘテロ男性にも開くことで、メトロセクシュアル性は、男性と女性、ヘテロとゲイの間に引かれた境界線を壊すということである。

だが、見られる対象になることや性的まなごしの対象になることは従来型の男性の人生を歩んできた男性にとっては脅威でしかない。当然、メトロセクシュアル概念には批判があび

せられた。コードが批判の代表例として挙げるのはウェブマガジン編集長のマイケル・ローズのものだ。ローズはメトロセクシュアルを「文化にたいする深刻な脅威」としたうえで、「メトロセクシュアルは、女性化した男性以上のものではない。なよなよして、安定せず、社会的に去勢されている。男女の区別が人の手によって消滅させられてしまった世界で、自分の居場所を探し求めている」と論難する。さらに「もっといえば、男性の規範にたいする攻撃である。いや、人間の性のありよう全般にたいする攻撃だ」、「ファッション業界のマーケティングによって、互いに支え合ってきた男と女の相互補完性が壊されつつある」とも述べている (Rose 2003)。

このメトロセクシュアルへの非難の根底にあるものは何だろうか？ それは、対象化され、受け身の立場で「見られること looked-at-ness」への居心地の悪さであるとコードは分析する。コードは、フェミニストで映画評論家のローラ・マルヴィの1975年のエッセイ“Visual Pleasure and Narrative Cinema” (Mulvey 1975 → 1992) で指摘された「見られる女／見る男」の非対称性に言及する。そして、「メトロセクシュアル性 metrosexuality」には、上記のような男女の非対称性を含む異性愛至上主義的な視線のありようを転覆させる作用があると述べる。すなわち、メトロセクシュアル性は、容姿へのうぬぼれ、ナルシズム、自己顕示欲、男性の視線の前で受け身になることといった、女性に帰属させられてきた特徴や役割を男性にも割り当てる。「ローズが不快に思うのは、男もまた欲望されうるという発想にたいしてである」 (Coad 2008: 34)。

さらに、見られる男性はたんに見られるだけにとどまらない。「掘られる be fuckable」可能性もある。「男性が性的に受け身であること、そして男性が同性のまなざしに潜在的にさらされていることこそは、ローズの恐怖——メトロセクシュアルは男性の規範にたいする攻撃、「人間の性」にたいする攻撃であるという恐れ——の源泉である。ただし、「人間の性」というのはその実、「異性愛者の性」でしかないわけだが」とコードは分析する (ibid: 34)。

メトロセクシュアル概念への非難と、その根底にある恐怖の分析からは、おおむね以下のことが分かる。①女性が引受けてきた役割を男性が引き受けることへの忌避感がある (見る／見られる男女役割の入れ替え)、②女性的な特質を有する男性には「不自然」という非難がなされる (「女性化した男性」「社会的に去勢」という批判)。

これらの忌避感や非難を本稿では「男女平等フォビア」と総称することにする。男女平等とはなにも法的権利の平等だけを言うのではない。社会的に構築され、人びとの日常的実践に埋め込まれ、固定化した性別役割に異議を申し立てることを「男女平等を希求する態度」と呼んで大過ないし、逆にこうした性別役割を、自然に由来した固定的なもののみなし、維持しようとする態度を「男女平等フォビア」と呼んでも差支えないだろう。

以上をふまえ、「草食系男子」の蔑称化の背景には、男女平等フォビアがあった」という仮説を設定し、検証する。具体的には、メトロセクシュアル概念への批判に見られたような、

「草食系男子」はなぜ蔑称化したのか

①男女役割の入れ替えへの忌避感、②女性的な特質を有する男性への「不自然」という非難が、草食系男子概念への批判にも見られたか否かを検討する。

資料として2009年に刊行された雑誌記事の言説のうち草食系男子を批判するものを取り上げる。雑誌記事は二段階に分けて選択した。第一に、2009年刊行のものに限定して大宅壮一文庫データベースで「草食男子」「草食系男子」をキーワードに記事検索し、112点の記事をピックアップした。第二に、これらに目を通し、草食系男子を批判する言説を含む記事17点を考察の対象とした（ただし、比較対象のため、本稿では肯定的な言説も適宜取り上げる）。対象となった記事は表1のとおりである。予備調査であり、資料の点数が少ないことは本調査の限界である。2009年の記事に限定したのは、この年に「草食男子」「草食系男子」でヒットする記事の件数が飛躍的に増えるからである。

本研究と先行研究¹⁾の違いについて述べる。草食系男子をテーマとした学術的な論考として日高優ほか(2015)「現代の青年における「草食系男子」の増加言説の検討」がある。現代の青年男子の恋愛にたいする態度が消極化しているか否かを明らかにすべく、「恋愛至上主義」傾向の有無や「不快情動回避心性(傷つきやすさ)」の測定などを心理学的なアプローチによって行ったものである。言説レベルで言われている現象が実態レベルで起こっているかどうかを検証する内容であり、言説分析を旨とする本稿とは根本的に問題関心が異なる。

熊谷圭知(2010)による学会発表要旨「草食系男子、オタク、ネオ(ブチ)ナショナリスト」は、変容する日本社会において新たに生じつつある男性性の諸相を捉え、それがナショナリティの再構築や地理学的な課題とどう結びつくかを検討する内容である。草食系男子は、そうした「男性性の諸相」のひとつとして挙げられている。

松岡律によるエッセイ「草食系男子をめぐる社会学的考察」は、草食系男子のクローズアップと批判をメディアが同時に行なうことで生じる「ジェンダーカオス」の様相を前編で書きとめたうえで(松岡2012a)、後編で長引く不況のなか、若い男子にとって父親が模倣すべき役割モデルとしての魅力を欠くことになった世相を描く(松岡2012b)。

単純化していえば、熊谷・松岡の論考の問題関心は「実在としての草食系男子はどのような社会のもとで生まれたか」である。ひるがえって本研究は、「草食系男子の蔑称化はどのような言説空間において進行したか」を言説レベルに着目しつつ問うものであり、やはり着目する位相と問題関心が根本的に異なる。

2 草食系男子をめぐる批判的言説

2-1 草食系男子概念の登場と展開

草食系男子にたいする批判的言説を検討する前に、この概念がどのような経緯で登場し、

表1 「草食系男子」についての批判的言説を掲載した雑誌記事（2009年刊行のもの）

No.	記事タイトル	雑誌	発行月（月日）
1	フリドラ男 「草食系男子」が増殖中！ でも私は断然“肉食派”（倉田真由美）	週刊朝日	3月13日
2	「草食系男子」が行く“癒し場”体験記！	FLASH	3月17日
3	“ラスプーチン”佐藤優のセカイを見破る読書術	週刊プレイボーイ	4月6日
4	“愛とエロスの伝道師”が“草食系男子”に喝！杉本彩「“知的な野獣”におなりなさい」	週刊ポスト	5月1日
5	緊急座談会「草食系男子」よ欲情せよ!?(渡辺淳一・中村うさぎ・福岡伸一)	週刊文春	5月7・14日
6	あとの祭り 草食系男子論 その一（渡辺淳一）	週刊新潮	5月28日
7	あとの祭り 草食系男子論 その二（渡辺淳一）	週刊新潮	6月4日
8	フーズク嬢を仰天させた、イケない男子の「草食系プレイ」	週刊プレイボーイ	6月15日
9	ブサイク男でも肉食系美女をゲット 草食系男子肉食系改造計画!!	sabra	7月
10	良さも悩みもそれぞれです。草食と肉食，どっちと恋する？	an an	7月8日
11	高須基仁の経済コンフィデンシャル第27回 「草食系男子」の増殖が日本経済をダメにする！（高須基仁）	実業界	8月
12	草食系男子と孤独死を増殖させる共同体なき「底抜けの世界」（宮台真司）	サピオ	8月19・26日合併
13	男の背中 草食系男子が増えると女性も大変かと……（北上次郎）	Men's Ex	9月号
14	草食系男子 いっそのこと弁当を売ってGDPアップに貢献（柴山政行）	プレジデント	9月14日
15	世界に飛躍する「人間力」の時代」第4回 草食系男子を叩き直すには「国民皆留学制度」しかない（大前研一）	サピオ	9月30日
16	ほんとうは恐ろしい「草食系男子」（内田樹）	新潮45	11月号
17	GACKT 編集局長の我苦人論 その3 「草食系男子だから、いい」いやいや、よくないでしょ？（GACKT）	ザ・テレビジョン	11月27日

「草食系男子」はなぜ蔑称化したのか

展開したのかをまとめておく。

「草食男子」という言葉を最初に使用したのは、コラムニストの深澤真紀である。2006年10月の日経ビジネスオンラインの連載「U35 マーケティング図鑑」第5回にて、「団塊ジュニア世代」で、「モテないわけではないが恋愛やセックスにががつしない」、「据え膳も食わないし、送り狼もしない」、「男女関係をワリカンで考え、女友達も大事にする」といった特徴を持つ若年男子をそのように名づけた（深澤 2006）。

この点は何度強調してもしすぎることはないので繰り返すが、この世代の男性には「女性差別的な人が少ない」という印象を深澤は持っており、この側面を肯定するために「草食男子」という名称で彼らの生態を紹介したのだった（深澤 2019：46）。

2007年6月には上記連載をまとめた単行本『平成男子図鑑 リスペクト男子としらふ男子』が刊行される（深澤 2007）。連載中は「草食男子」より「リスペクト男子」や「しらふ男子」のほうが話題になっており、のちに深澤は「当時の関係者は私を含めて誰一人、「草食男子」が流行するとは全く思ってもいなかった」と回顧している（深澤 2009）。

2008年7月、大学教授の森岡正博が『草食系男子の恋愛学』を刊行する（森岡 2008）。「異性のががつと求める肉食系ではない」「新世代の優しい男性」を「草食系男子」と位置づけたうえで、彼らにたいして「心の中の「誠実さ」を、具体的な行動に表して、女性へ届けるための技術」を授ける書であり、凡百の恋愛テクニック本とは一線を画す内容であるとしている（同書カバー）。

不思議なことに草食系男子のはっきりした定義は本書にはない。代わりに森岡の二冊目の草食系男子の本で説明されている。「草食系男子とは、心が優しく、男らしさに縛られておらず、恋愛にガツガツせず、傷ついたり傷つけたりすることが苦手な男子のことです」（森岡 2009：7）。森岡による定義からは、深澤が最初に示した「モテないわけではない」、「女友だちも大事にする」ニュアンスが消失している。

同年11月、マーケティングライター牛窪恵が『草食系男子「お嬢マン」が日本を変える』を刊行する。「飲まない、買わない、セックスしない……増殖する超人類が市場を変えてしまう！」「オンナ化する男子の、新しい幸福のカタチ」（同書帯）を探ったもので、年長の男性とは異なる若年男子の消費行動を観察する内容である（牛窪 2008）。「女性化」する男性の消費行動に着目する点で、牛窪の用いる「草食系男子」はアメリカにおける「メトロセクシュアル」概念に近い。

2009年2月、深澤へのインタビューにて、インタビュアーが「草食男子」について「今はいろいろな解釈が出てきています」と深澤に話をふっているのを確認できる（日経ビジネスオンライン 2009）。

同年3月、エッセイストの桜木ピロコが『肉食系女子の恋愛学——彼女たちはいかに草食系男子を食いまくるのか』を刊行する。街角で異性に声をかけるのも、セックスに誘うのも

「女性の役割」になったとの記述、「男たちは、好みの女性のタイプもなければ肉欲もない。そもそもしっかりとした意志もない。だから、誘われればよほどのことがない限り、男たちはついて行く」との男性の描写がある（桜木 2009：16-7 頁）。

同年5月、エッセイストのアルテイシアが『草食系男子に恋すれば』を刊行する。元肉食系女子の著者が、恋愛に不慣れな草食系男子こそ最高のパートナーであり、彼らとの結婚を女子にすすめる内容である（アルテイシア 2009）。

同年6月、草食系男子研究会による『うわさの草食系男子』が出版される。主に女性読者に向けて、草食系男子の生態を解説するコミックエッセイである。草食系男子にも「インテリ系」、「オレ様系」などがあり、さらに「アキバ系」もまた草食系であるとの論も見える（草食系男子研究会 2009）。深澤が提示した「草食系男子」概念はもはや原型をとどめておらず、概念として空中分解を起こしている印象がある。

同月には牛窪が『草食系男子の取扱説明書』を刊行している。草食系男子には「独特の美学」や「ツボ」があるので、それを押さえて、周囲の人間が彼らにうまく接することを薦める本である。また、「オレって草食系？」と疑問に思う男性が自身をチェックする用途にも使えるとしている（牛窪 2009：3 頁）。

同年7月、深澤の『平成男子図鑑』の文庫版として『草食男子世代——平成男子図鑑』が出版される（深澤 2009）。底本と違い、タイトルには「草食男子」の言葉が入った。「誰一人、流行するとは全く思ってもいなかった」同概念が流行したためであろう。

同月は、森岡が女性に向けて草食系男子をすすめる『最後の恋は草食系男子が持ってくる』も出版されている（森岡 2009）。その紹介記事で、「草食系男子」という言葉の「生みの親」として森岡が紹介される（『マリ・クレール』7月号：56, 8 頁）。

同年12月、「ユーキャン新語・流行語大賞」トップ10に「草食男子」がランクインする。授賞式には、深澤と、ドラマ『おひとりさま』で年上の女性に恋をするかわいらしいタイプの青年を演じた俳優の小池徹平が出席した。

以上の流れをまとめておく。第一に、深澤が最初に「草食男子」という言葉を使いはじめたから同概念が流行するまで、およそ1年9ヶ月のタイムラグがあったということである。深澤が日経ビジネスオンラインの連載で「草食男子」という言葉を使ったのが2006年10月で、森岡が『草食系男子の恋愛学』で「草食系男子」使ったのが2008年7月である。そして、森岡の著書以降、草食系男子の消費行動やライフスタイルを解説する本、草食系男子を恋愛対象として女性にすすめる恋愛本や、女性に向けて解説をするコミックスなどに波及していったことが分かる。

第二に、当初は肯定的な意味あいがあり、かつ「モテないわけではない」はずだった草食男子がネガティブなニュアンスをまとった「恋愛や結婚に臆病な男性」へと意味を変えていくのは、2008年の森岡の著書『草食系男子の恋愛学』からであることが推察できる。

「草食系男子」はなぜ蔑称化したのか

森岡がこの書をもしたのは、自身が若い頃に恋愛で苦勞したからだった。若い頃の森岡は、背が低く、もやしのようなひょろひょろの身体をしており、日常会話や雑談をするのも苦手で、中学・高校でのデート経験は無く、思春期に身近にいた女性は母親だけという生活を送っていた。大学生になって合コンに参加するも、異性と話が盛り上がることは決してなかった。今となっては間違った考えであると自覚していると森岡は述べるが、当時は「自分が他人よりも劣っているから、そのせいでモテない」という考えに捉われ、劣等感をかかえ、「自分はモテる」と自慢している男にたいして小さな殺意に似た気持ちが湧きあがることもあった。壮年期を迎え、人間の心の機微について理解した現在、かつての若い頃の自分に授けるようにして「恋愛面での的確なアドバイス」を読者にたいしてするのがこの本の目的となっている（森岡 2008：4-5）。

つまり、『草食系男子の恋愛学』が冠する「草食系男子」の人物像が、若い頃の森岡のような劣等感にまみれた恋愛に臆病なタイプになることはこの本の企画当初から決まっていたことであった。深澤が提出したポジティブな「草食男子」とは、はじめから別物だったのである。そして、その後の「蔑称化」の流れを見れば、流行したのは、どちらかといえば後発の森岡的な人物像のほうであった。

ともあれ、「草食男子」という言葉を使いはじめたのは深澤であること、深澤としては彼らのポジティブな側面にスポットライトを当てるつもりで使いはじめたことを、ここでは銘記しておきたい。

2-2 批判的言説

それでは、2009年刊行の草食系男子をめぐる雑誌記事に見られる批判的言説にはどのようなものがあるのだろうか。大別して、①草食系男子のコミュニケーションに関する言及、②性行動に関する言及、の2種類に分かれた。両者にまたがる言説もあるが、便宜的にどちらかに分類したうえで、それぞれについて以下に見ていく。

2-2-1 コミュニケーションに関する言及

まず、「①草食系男子のコミュニケーションに関する言及」を検討する。深澤によれば、草食男子は、誰かをものすごく好きになることが少ないぶん、誰かをものすごく嫌いになることもあまりないゆえ、精神的なアップダウンが少なく、性格が安定しているという。「女子というものが、恋愛やセックスの対象だけではないことを知って」いるうえ、「女子を「人間」として見て」いるので、一緒にいて楽しければ「女友達」として大切にするという。深澤はこうした草食男子の異性との関係の結び方を「人間関係の成熟した形のひとつ」として評価する（深澤 2007：131-3）。

端的に言えば草食系男子はコミュニケーション上手であるということなのだが、雑誌言説

には草食系男子をまったく異なるものとして描くものが少なくない。

たとえば作家の渡辺淳一は、草食系男子と目される若い男性と話をして彼らのプライドが高いことを確認したうえで、「恥をかきたくない」という思いが強く、それが最大の枷となって、女性たちに積極的に近づく気持ちが失せているようである」と診断をくだす。そのうち、「恥をかきたくない」という気持ちは捨てるべきであると若者にたいして述べ、なぜか、顕微鏡で自分の精子を見てみる、動き回っているではないか、と説教をはじめ。そんな渡辺の姿は「熱い（暑苦しい）人間関係を草食系男子に求めてしまって、空回りしてしまうこともある肉食おやじ」（深澤 2007：134）そのものであるが、それを措くとしても、渡辺の把握する草食系男子の特徴は「コミュニケーション上手」からかけ離れたものである。

作家の北上次郎が、女性の送る秋波に気づかない男性を挙げて「こういう草食系男子が増えると（昔は朴念仁と言ったものだが）、女の子のほうも大変だなあと思った」と感想を述べているが、これも草食系男子概念の誤解にもとづくものといえる（『メンズエックス』0909：153）。

大学教授（当時）の内田樹は、草食系男子を「結婚に困難を覚えている人」と目したうえで「他者との共生能力」が劣化していると見なす。彼らは「弱くてかわいい」男を演じる一方で、凶暴で攻撃的なペルソナも持ちあわせており、二極のペルソナがあまりに隔絶しているので、人格が統合できないのだという。「卑屈なほど恋人に尽くしてきた男が、結婚と同時にいきなり荒れ狂うDV男に変わってしまったという事例は実際に私も知っています」という内田は、危機的な状況におちいったさいの草食系男子は「凶悪で利己的な男」に「人格解離」を起こすかもしれないと結論する（内田 2009：92, 97, 99）。

同様のことは作家の佐藤優も述べており、「職場でも、草食系と思われていた人が管理職になると極端に強圧的になったり、部下をねちねちいじめたりすることがあるが、それは、他者攻撃に際しての抑制機能を欠いているからだ」と自らが見聞したエピソードを披露している（佐藤 2009：69）。内田の「人格解離」と似た印象を佐藤も草食系男子にたいして抱いていることがわかる。両者の描く草食系男子像に深澤が示したような「成熟した人間関係を結ぶ若者」の片鱗は一切ない。

「性風俗に行く草食系男子」を扱った記事では、風俗嬢に自ら持参したコスチュームを着せたうえで、細かい指示を出してポーズを取らせて、それを見ながらオナニーする若者が紹介され、「生身のコが目の前にいるのに、彼らが求めるのは自分のイメージどおりの女。現実の女のコにそれを要求するのは怖いからフーズクで実現してるのか？」とのコメントが付されている（『週刊プレイボーイ』090615：59）。自分が思う女性像を相手に押しつけるという要素は、深澤が提示した「女子のことを「人間」として見る」とはまったく逆のものである。

男性誌『sabra』が女性を集めて「草食系男子」について語り合ってもらった座談会でも、コミュニケーション不全が指摘されている。「うちのサッカーチーム、誰も彼女いないから

「草食系男子」はなぜ蔑称化したのか

女のコ紹介してよ」と男性から女性に合コンのセッティングを頼んできたのにもかかわらず、男性たちだけで乾杯前からサッカーの試合の話で盛り上がっていたことが困惑ぎみに語られている。

「話をしない」のもこの座談会で列挙された「草食系男子」の特徴である。「草食って反応がないから嫌。何もしゃべらないし、私の話にもロクに反応しないから面白くない。ソノ気がないなら1人でいればいいのに」、「食事に誘うまではいいけど、その先が何もなし。25歳の男のコなんだけど、いつも最初に「何かないんですか最近？」って聞いてくる。で、近況を話した後に「そっちは？」と聞き返すと自分は「サッカー」だけで終了。その後はひたすら沈黙……」、「それ以前に意思表示しない人が多いよね。本心を見せないほうがカッコいいと思ってるのかもしれないけどさ」と、「草食系男子」が女性たちの不興を買っている。

さらに同誌は「草食系男子」と「肉食系女子」を実際に合コンさせ、その一部始終をレポートしている。「みんなが集合し、注文までのごちない間こそ大事な時間帯なのに、気がつかば、自己紹介さえしていない草食系男子たち。もちろん、注文もしようとさえしない」様子が非難のニュアンスをもって描かれる。彼らは、しびれを切らした女性が注文を取りはじめ、料理が来ても女性を取り分けてくれるのを待っている。レポートは、「草食系男子の正体は実は“男尊女卑”の考えを根強く持っている男たちなのかもしれない。それほどまでに女子にまかせすぎるのだ」とコメントする。末尾は、「疲れたなあってのが第一かな。なんもやってくれないし、女子ウケする話題に乏しくて辛かったあ」、「ああいう人たちがいるんだね。第一印象は草食系っていうか“オタク”っぽいなあと思った（笑）」という女性たちの講評によって締められている（『sabra』2009年7月：42-3）。

プライドの高さゆえ積極的に女性に近づかず（渡辺）、朴念仁で（北上）、凶暴なペルソナに人格解離するかもしれない危険性を備え（内田）、他者攻撃の抑制機能を欠き（佐藤）、自分の思う女性像をおしつけ（『週刊プレイボーイ』）、女性が話しかけても反応せず、男尊女卑である（『sabra』）。これが「草食系男子」であることに雑誌言説上ではなっている。深澤が最初に示したような、精神的に安定し、女性を一人の「人間」とみなし、「成熟した人間関係」を結ぶことができる草食男子像とはかなりかけ離れている。

2-2-2 性行動に関する言及

次に、「②草食系男子の性行動に関する言及」を検討する。深澤によれば、草食男子とは「そこそこもて、恋愛経験もセックス経験もある」男子のことを指すのであった。「がつがつせず、余裕があるので、草食男子はそこそこもて、恋愛経験もセックス経験もあります。そこそこの経験があるからこそ、彼らは草食男子になれるわけです」という記述からは、「そこそこの経験」が「余裕」を醸し、それがまた「そこそこの経験」につながっていく循環に身を置いていることが草食男子の必要条件であることが分かる。巷で言われているような

「経験がない（もしくは少ない）」や「奥手である」という条件は本来の説明にはない。彼らはまた「恋愛やセックスに困っていない」。女性から告白されたり、女友達や元カノ（元彼女）と「うっかり」「深く考えずに」セックスをしてしまったりするので、「ちゃんとした彼女がいなくても、恋愛やセックスに困って」いないという（深澤 2007：127-8）。

背景には、女性の性意識と性行動が変容し、20代前半の未婚男女の性経験率がほぼ同じになってセックスが特別なことではなくなってきたこと、アダルトビデオやネットのアダルト情報が充実し、ちょっとオナニーしたいぐらいならこれらの情報で十分になってきたことがあると深澤は述べる（深澤 2007：129）。

ところが、雑誌言説における草食系男子の性のありようは、深澤が描いたものとは異なる。『週刊ポスト』は「恋愛やセックスに積極的ではない、周囲とゆるいつながりしか求めない男性のこと」と定義する（『週刊ポスト』2009年5月1日：14）。深澤は「草食男子は誰かをものすごく好きになることが少ないぶん、誰かをものすごく嫌いになることもあまりありません」と述べてはいるが、「周囲とゆるいつながりしか求めない」という防衛的な姿勢を意識的に持つとは書いていない。「恋愛のプロセスを面倒くさがり、女のコに対してガツガツしてない男たちのこと」というのは『週刊プレイボーイ』である（2009年6月15日：56）。「面倒くさがり」という特徴は深澤の説明にはなかったものである。

佐藤は、草食系男子にかんする文章のなかで、女性にセックスを無理強いしてはならないという助言を「正しい」としたうえで、「ただし、人間も動物である。男のキンタマからは性欲が湧き出してくる。これをいつも理性で抑えようとしていると、思わぬ時に大爆発を起こす危険がある」と述べる（『週刊プレイボーイ』2009年4月6日：68）。深澤によれば草食系男子は「恋愛やセックスに困っていない」のだから、佐藤が言うような「大爆発を起こす危険」はないはずである。本来の草食系男子の定義から解離した理解であるといえる。

草食系男子の性風俗産業へのコミットの仕方についても、本来のものとはかけ離れた説明が散見される。深澤は「草食男子の多くは、リアルなアダルトサービスである風俗や水商売に対しても、強い関心がなかったりします」と説明する（深澤 2007：129）。しかし、『FLASH』の記事「「草食系男子」が行く“癒し場”体験記」は、素人女性がデートののち「手コキ〔引用者注：手指を用いて男性器に刺激を与え、射精させる行為〕」をしてくれる専門店や、体が柔らかい女性ばかり、「巨乳痴女」ばかりが集まるヘルスを紹介し、これらを「草食系男子向け風俗店」として宣伝する。

制服姿の女性に踏まれるリラクゼーションの店、女性の膝枕でヘッドマッサージを受けられる店（膝枕をしてもらいながらテレビゲームができるコースも併設している）といった必ずしも射精を目的としない店の紹介もあるが、いずれも女性との肉体的接触を売りものにする風俗産業であることには変わりがない。同記事には、「彼らはお金を払って風俗やキャバクラへ行くこと自体好きではないのでは」との森岡のコメントが引用されているが、記事か

「草食系男子」はなぜ蔑称化したのか

ら完全に浮いている（『FLASH』2009年3月17日：82）。

『週刊プレイボーイ』の記事「フーズク嬢を仰天させた、イケない男子の「草食系プレイ」は「ライト系フーズク」で働く女性に「草食系男子」の客の様子を尋ねる内容である。「カラダに全然触れてこないお客さんは増えました。例えば、服を脱ぐのもシャワーも全部ひとりでやりたがるんです。サービスに入ろうとしても、こっちから触れるようなプレイはすべて拒否」、「草食系の若いお客さんは、同じくプリンやケーキをお土産として持ってきて、ただ一緒に食べながら話すだけの人が多い」、「フェラしながら、69の体勢になろうとしたら、私のお尻を汚いみたいにはらいのけて、全力で拒否られたの。しかもその人、自分のカバンからいきなりゴム手袋を取り出してハメてから、無言で手マン〔引用者注：手指を用いて女性器に刺激を与える行為〕を始めたワケ!」といった風俗嬢の証言を挙げ、「変わった草食系男子の生態」を面白おかしく紹介している（『週刊プレイボーイ』2009年6月15日：57-8）。

「草食系男子向け風俗店」の存在を喧伝し、「草食系男子」の風俗店での変わったプレイを報告するこれらの記事は、「リアルなアダルトサービスである風俗や水商売に対しても、強い関心がなかったりします」という深澤の説明から受ける印象とはだいぶ異なる草食系男子像を描いている。

一方で、深澤の定義から大きく逸脱はしないものの、その解釈を異にする言説もある。深澤は草食男子の下位カテゴリーとして「雑魚寝男子」や「添い寝男子」がいることを報告している。前者は「男子と女子が隣同士で寝て、肩を貸したり腕まくらをして、そのままふたりでなにもなく眠る」行動をとる男子のことであり、後者は「体調を崩していたり、失恋などで精神的に弱っている女子のもとへ、「今日オレが添い寝しにいてやろうか」と現れる」男子のことであり。「雑魚寝男子」も「添い寝男子」も女性に性行為を無理強いすることはない。「弱ってる女を襲うなんて、意味わからないっすよ」というのが彼らの主張である（深澤2007：130）。彼らのふるまいが深澤によって好意的に語られているのは言うまでもない。

この「添い寝をするだけ」の草食系男子の特徴を取り上げ、「女性たちから不興を買っている」という誌面づくりをするのが、すでに引用した『sabra』2009年7月号である。

「2人で漫喫の個室にこもったのに、DVDを見ただけで終わった」ことが女性の口から不満げに語られ、「高校生のとき、気になる男のコが家に来て、私の部屋で2人きりでDVDを見てたんです。そのとき、彼が私のベッドの上に当たり前のように座ったので、「ああ、来るな♥」と覚悟を決めたんです。でも、ソワソワしながらチラッと見たら彼はいつの間にか爆睡。結局夜中までいたのに何もなくて終了……」という体験が残念な思い出として披露される。

「酔った勢いで私からラブホに連れ込んだ男がいたんだけど、一緒に寝ても何も起きな

い。で、ガマンできなくなって、こっちからチューして男のパンツの中に手をつっこんだの。そしたら中身はフニャフニャ。で、握ってしごこうとしたら「まーまー」と手を引き出される始末——。そして朝まで添い寝で終了——」という回顧談、「2, 3年彼女がいないのにペロチューだけする女のコはいるっていう男友達がいた。お泊まりしてもそれ以上の行為はナシ。理由を聞いたら「彼女が何もしてこないから。何かされたら考えるー」って。お前は牛か!？」といった報告もあり、「添い寝男子」を徹底的にネガティブなものとして語る言説が続く。

深澤の親友である漫画家の倉田真由美は、深澤の説明を正しくふまえたうえで、女性であるからといって誰彼かまわず性の対象とするわけではない草食系男子のありようを否定する。「深澤真紀本人は、「私は草食系、好きだよ。女を女としてしか見ない男なんて、むかつくわ」と言うが、私には草食系男子って物足りない。性の対象にならない女とご飯を食べる時間があるなら、海に出てカジキでも釣ればいいと思う」²⁾、「お互い性的対象ではない男女で、仲のいい友人関係を築ける人もいるようだが、私にはそんな男友だちはいない。だったら、女友だちのほうがはるかにいいと思ってしまう」(倉田2009:49)。

タレントの優木まおみは、草食系男子をめぐる座談会において、最初こそは「私は草食系が好きみたいです(笑)」と語っていたが、話が性行為のことに及ぶと「一緒にの部屋に寝ていて何も起こらないなんて絶対変ですよ。その気がないならついてくるな! って感じ」と述べ、「うーん、私、やっぱり草食系もダメかも…」と当初の評価を翻している(『an an』2009年7月8日:33)

『sabra』の女性たち、倉田、優木による言説は、「草食系男子は、女性と関係性が近くなったからといって、性行為に必ずしも及ぶわけではない」という本来の説明を正しく理解したうえでその意味づけを変更するものであり、もとの理解が間違っている佐藤ほかのものとはタイプが異なる。

倉田や優木のネガティブな意味づけがなされたほうの「草食系男子」概念を本来のそれと誤認し、草食系男子を論難するエッセイをものしているのが作家の渡辺淳一である。

「彼等に比べて、最近の男の子は草食系だ、というわけだが、これをいいたしたのは女性たち、とくにやや年齢が上の、四十歳前後の女性たちのようである。彼女たちは「婚活」などと称して、結婚願望が強いようだが、そうした誘いに同年代から、やや下の男性たちは容易にのってこない。そこで、「男ならもう少し男らしく、堂々と女を追いかけなさいよ」といいたのが始まりのようである」(渡辺2009:60)

渡辺の理解では「草食系」を言い出したのは結婚願望が強い市井の女性たちであることになっているが、実際にはコラムニストの深澤が記事の中で言いはじめたことである。また、「堂々と女を追いかけない」様子が女性によってネガティブに評価されている前提があるが、

「草食系男子」はなぜ蔑称化したのか

草食男子の名付け親の深澤は、恋愛に「がつがつしない」彼らの様子を「女子のことを「人間」として見ている」、「人間関係の成熟した形のひとつ」として好意的に評価した（深澤 2007：132）。これらの事実を無視した渡辺の文章は、「歴史的改竄」の痕跡といってよい。

2-2-3 「順応」概念をめぐる政治

そんな渡辺が、生物学者の福岡伸一、作家の中村うさぎとの鼎談において、福岡の説得のもとで草食系男子を見直している一場面がある。

その過程で、重要な役割をしているのが「順応」の概念および、「草食系男子」とは現代社会に男性が「順応」した結果であるという発想である。

女子に積極的にアプローチせよと男子に説く『欲情の作法』が30万部を超えるベストセラーになった渡辺は、当然、草食系男子には否定的である。そんな渡辺に「ちょっと問題発言かもしれませんが」と福岡が切り出す。「私自身は、男性も女性も色々な人がいいと思っています。生物多様性の点からすると、むしろその方が望ましい。石器時代のように男は戦いに勝てないと価値がないだったら、私なんかもう死んでます（笑）。研究活動をしたり文章を書いて生計を立てている人なんて無用ですから。だから、草食系も含めて多様性が許される状況は、そう悪くないんじゃないかなと」。明かな草食系男子肯定論であり、渡辺とは対立する。

それにたいし渡辺は、「多様性も結構だし、個人的に言えば男子が植物系でも一向に構わない」と断りながら、「でもそれが性的な弱体化から、やがて人類の滅亡の方へすすむとなると心配なんだよね」と返す。「これは結構深刻なことだね。欧米を含めて、先進国のほとんどで人口が減ってきているのは事実だし、精子が減っているというデータもある。〔中略〕変わることは当然前だけど、それが人類生存に関わるならば、やっぱり問題」と福岡に反論している。

これを受けた福岡は、「ただ、地球上に生命が現れて三十八億年経ちますが、ずーっと続いている種なんて、一つもないわけです」と言って、渡辺の同意を得る。そして続ける。「自然も環境も、そして生命も、すべて勃興するものがあれば廃れていくものもあって、全体としてバランスをとって存在している、という動的平衡の考え方からすれば、人という種族がどこかの段階で亡びるのはしかたないことだ、と思うんです」。

渡辺はこれに反論せず、「そう考えると、ダーウィンはすごいね」と納得する。というのも、「長く生き残る種と、早く絶滅した種との違いは強さや賢さではなく、変化に対応できたかどうかだ、と見抜いたから」である³⁾。そして、「わりあいイージーに変化できたやつが生き残るってことでしょ。これは現代の会社組織にも通じることだよ」と自ら述べる。

福岡は、「変化は順応、ということですよ」と渡辺の発言を受けたのち、「であれば草食系も「生き残りのための変化」であって、この傾向はどんどん進んでいくかもしれない」と

持論を展開する。

こうしたやりとりののち、渡辺は、鼎談の終わりのほうで「いずれにしても、男というのはかくあるべき、という規定を昔のまま引きずっていくのは無理ですね。ある程度変えて、容認していかないと」と認めている⁴⁾。草食系男子が社会の変化に順応した男性のありかたの一形態であり、肯定的に評価してよいものであることを渡辺が理解した瞬間である。

「草食系男子は、男子が現代社会に順応した結果である」という福岡の考え方は、この鼎談の通奏低音となっている。「やさしい男が好き」と言う女性たちの声に応じて男性がやさしくなると、今度は歴史好きの女性たちが「戦国時代の武将〔引用者注：渡辺によれば「人殺し集団」〕がいい」などと価値観を変えていることを「勝手ですよ（笑）」と冗談まじりに渡辺がなじる場面がある。それを福岡は笑って受け止めたうえで、「でも、その女性のリクエストも、生物学的には頷けるところがありますね」と述べ、「そもそも男は後から作られた性だから、常に存在意義が必要なんです。女性は最初から、自明のものとして子供を産む性ですけど、男はもともと単なる運び屋。だからそれ以外の存在意義が常に必要なんです」と解説する。「運び屋」というのは、遺伝子の、ということである。

そのほか、「草食化も「生き残りのための変化」であって、この傾向はどんどん進んでいくかもしれない。最終的には、遺伝子を運ぶ役割が今の男の形じゃないものにとって代わられる可能性もある。まあ、何億年も先でしょうけど」との発言も見られ、男性が状況に応じて「存在意義」＝役割を変えていくべき、まさに「順応」が生存戦略となる性であるとの福岡の認識が見てとれる。

また、「草食系男子の増加は、テストステロン（攻撃欲や性欲をつかさどる男性ホルモン）値が減っているからではないんですか？」⁵⁾という中村の質問に、「私たちのホルモン値というのは、環境との動的な相互作用で決まるわけなので、社会のあり方が変わればホルモンバランスも変わるんです。だから、順番としては社会の変化が先にあると思いますよ」と福岡が答える場面もある。「社会の変化」に身体がありようが「順応」するのであって、その逆ではないという発想をこの発言に見いだすことができる。

このように福岡は、草食系男子を社会への「順応」の結果と見なしおり、「順応」の発想は草食系男子を肯定的に評価するよすがとなっている。

だが、「順応」はいつも草食系男子を利するキーワードになっているわけではない。同じように草食系男子を「順応」の結果と見なしながら、草食系男子を否定する言説も存在する。社会学者の宮台真司は、「生身の女の子は面倒なので〔恋愛対象とするのは〕ヴァーチャルで十分」という大勢の学生と出会い、彼らを「草食系男子」と見なす。そして、これを「社会的適応、つまり「その方がラクに生きられる」という変化」と分析する（宮台2009：103）。宮台は「適応」という言葉を使っているが、福岡のいう「順応」と意味は同じである。

続けて宮台は、情報ツールの発達を背景に、人間関係が流動化し、お互いがお互いを「取

「草食系男子」はなぜ蔑称化したのか

り換え可能な相手」と思って疑心暗鬼になる社会では、人は異性関係に深入りしなくなると想定する。こうした世相の変化を宮台は「マズい展開です。特に男性にとって深刻です」と評価する。なぜならこの先にあるのは「孤独死」あるのみだからである。宮台が挙げるのは、大規模な団地では年間20万人が孤独死を迎えるが、大半は老人ではなく45歳から60歳までの中年男性であるというデータである（宮台2009：103）。明言こそしていないが、だから草食系男子はやめろ、というのが宮台の忠告である。

一言で言えば、草食系男子を「適応」の結果と見なしながら、最終的にその「適応」を否定する議論である。しかし、これはきわめて偏向した議論である。「適応」の行き着く先が孤独死で、それを避けたいのであれば、男子も家事能力を身に付け、健康にたいするセルフケア意識を高めるなどして、一人で生きていかなければならない現状に「適応」すべし、という議論も可能だからである。しかし、そうはならないのは、「ケア労働は女性にしてもらって当たり前」という意識から宮台が脱却できていないためだろう⁶⁾。

「適応」を草食系男子否定の文脈で使用することは、起業家の大前研一も行っている。草食系男子を「モノを所有することや出世することに対して欲望のない「物欲・昇進欲喪失世代」と深澤のそれとはかけ離れた定義をし、「結婚やセックスだけでなく、仕事を含めたライフスタイル全般において、パッシブ（受動的）でアンビション（大望、野心、覇気）がない」と論難し、「これから世界と戦わなければ日本が没落するという時代に、こんな弱々しい日本人ばかりでは困る」と怒りをあらわにする（大前2009：43）。

そして「草食系男子改造計画」を提案する。「人間は動物であり、動物は環境の産物である。今の日本の子供たちを取り巻く環境が彼らを草食にしているわけだから、これを直したいなら環境を変えることだ。つまり、親と学校（文部科学省）から引き離せばよいのである」。「環境を変える」具体例として挙げられるのは海外留学である。留学から脱落する者もいるだろうが、「自然淘汰によって種は進化する」のでそれも仕方がないとダーウィンを引きながら述べている（大前2009：44）。親のつとめは「自分の子供が草食系にならないような環境を与えてやること」であり、その環境における唯一無二の法則は「弱肉強食」と「適者生存」であるとの言辞が見られる。「外向き・上向き・前向きでアンビションのある人材を創り出すためには、死ぬなら死ぬ、と突き放す覚悟も時には必要なのである」（大前2009：45）。

大前が使っている言葉は「適者生存」であるが、福岡の「順応」、宮台の「適応」と互換可能である。草食系男子を肯定する文脈で福岡が使用した「順応」に相当する概念を、草食系男子を否定する文脈で大前が使用できるのは、大前が「環境」を日本国外にも広げているからである。留学先に挙げられるのは、「年間80万円で1年間の学費と生活費が足りる国」、つまり、中国、タイ、ブラジル、ベトナム、カンボジアなど、日本に比べて生活が楽ではない地域を含む国々である（大前2009：44）。この環境に適応または順応すれば「脱・草食

化」が図れるというのが大前の議論である。

しかし、大前の立論が可能になるのは、日本の環境が「生ぬるい」ものであることを前提とした場合に限られることには注意が必要だ。むしろ「厳しい」のが現代日本の環境であり、それに「順応」もしくは「適応」した結果が草食系男子であるという論を展開するのが小説家の高橋源一郎である。高橋は草食系男子にきわめて好意的である。

高橋は、「右肩下がり」しか知らない若者の目に映る現代社会を、「少しずつ没落し、景気は悪くなってゆく」ものとして把握し、「もっと悪くなるかもしれない、肉食獣がうろつくサバンナみたいな世界で生きてゆくためには、身を守る手段を自分で見つけなければならない。社会が守ってくれないなら、自分たちでそんなコミュニティーを作らなければならないのだ」と草食系男子の行動に理解を示し、「親」や「家族」や「地元の友だち」を大事にする彼らを肯定する。「外敵がいつ襲ってくるかもしれない草原で生きるための智慧を、彼らは自力で見つけ出したのである」とも述べ、草食系男子化を困難な状況を生き延びるためのサバイバル術として位置づけている（高橋 2009：51）。

3 まとめと考察

3-1 まとめ

当初の問題関心は、「『草食系男子』の蔑称化の背景には、男女平等フォビアがあった」という仮説を設定し、検証することであった。具体的作業（メトロセクシュアル概念への批判に見られたような、①男女役割の入れ替えへの忌避感、②女性的な特質を有する男性への「不自然」という非難が、草食系男子概念への批判にも見られたか否かの検討）の結果を示しながら、如上の問いに答えることにしたい。

まず、「①男女役割の入れ替えへの忌避感」であるが、これは存在した。恋愛において女性をリードするのが男性役割なのだとしたら、「草食系男子」はその役割を果たさないという理解がなされたうえで（その理解は深澤が最初に示した説明とは全く異なるものなのだが）、非難の対象になっていた。プライドの高さゆえ女性たちに積極的に近づかず（渡辺）、女性が送る秋波に気づかず（北上）、合コンでは料理の注文も会話も女性に任せっぱなし（『sabra』）なのが「草食系男子」であり、「恋愛はもとより、女を口説く資格を、初めから捨てているようなもの」（渡辺 2009：61）、「女の子のほうも大変」（北上）、「疲れる」、「辛い」（『sabra』が企画した「草食系男子」との合コンに参加した女性）と批判されていた。

「草食系男子」が行く先は「孤独死」とあるという宮台の発想にも、男女役割の入れ替えへの忌避感がある。すでに指摘したように、そこには「ケア労働は女性にしてもらって当たり前」という意識があり、女性の役割に男性がコミットすることを避けたがる心性が確認できる。

「草食系男子」はなぜ蔑称化したのか

「②女性的な特質を有する男性への「不自然」という非難」についてはどうだろうか。これも「草食系男子」を独自に定義した言説のなかに存在した。「キンタマから湧き出る性欲を理性で抑える」若者を「いつか大爆発する」と脅す言説（佐藤）、生身の女性を前にして触れようとしないう若者やオナニーしかしない若者を「変わり者」とする言説（『週刊プレイボーイ』）は、「女性的な」というタームこそ使っていないものの、そうした行動は男性が取るものとして「不自然」である、という価値観を内包している。

同様の価値観は、深澤による本来の草食系男子の説明を正しくふまえたうえで彼らを非難する言説も内包している。漫喫や自室やラブホテルで異性と二人きりなのに何もしてこない男子が残念そうに語られ（『sabra』に登場した女性、『an an』座談会の優木）、性の対象にならない女と食事をする男性が「物足りない」と言われていた（倉田）。

以上の結果から、本邦における草食系男子批判にも、アメリカのメトロセクシュアル批判と同様、「①男女役割の入れ替えへの忌避感」、「②女性的な特質を有する男性への「不自然」という非難」が存在することが明らかになり、したがって「男女平等フォビア」を内包していると言えることができる。

とはいえ、例外となる言説もあることも述べておく必要がある。『sabra』は料理の注文も会話も女性に任せっぱなしの「草食系男子」のことを、「正体は実は“男尊女卑”の考えを根強く持っている男たち」と目していた。これは、「きょうび、合コンにおいて、料理の取り分けや注文は男子の仕事」（42）という前提を編集部が持っているからである。『sabra』編集部にとっては、「草食系男子」批判はむしろ男女平等志向にもとづくものであって、男女平等フォビアなど言いがかりだ、ということになるだろう。「草食系男子」を批判する者が、なにをもって所与の「男性／女性役割」とするかにより、その批判の身ぶりから読み取れる価値観（男女平等志向または男女平等フォビア）は変わってくる。

こうした例外はあるものの、総体的には、「草食系男子」批判の言説は、男女平等フォビアを内包しているといつてよい。

男女平等フォビアを内包した言説以外に、「適応」概念を用いた草食系男子言説も確認できた。これは草食系男子を否定するのにも肯定するのにも用いられていた。これについては次節で考察する。

3-2 考察

以上の結果からどのような示唆が得られるだろうか。

第一に、日本社会における男女平等フォビアは根深いということである。メトロセクシュアル批判になく「草食系男子」批判にはあった現象として、対象となる概念の換骨奪胎がある。深澤が提示した草食系男子の説明を各論者・各誌は自分たち流に読み替え、深澤が示した草食系男子の新規性や「よさ」を徹底的にそぎ落としたうえで、本来の説明とは異なる

「草食系男子」を非難していた。いわば「藁人形たたき」である。女性を人間として見る、女子と二人きりだからといって性行為を強要しない、といった新規性や「よさ」を無視する精神は、「女性を人間として見る必要はない」、「女子と二人きりなら相手の意向を無視してレイプに及んでもよい」という発想と地つづきである。

男女平等的な新しい概念の徹底した無視と貶価は、「負け犬」批判にも見いだすことができる。作家の酒井順子によるエッセイ『負け犬の遠吠え』（2003年）は、「どんなに美人で仕事ができても、30代以上・未婚・子ナシは女の負け犬」と述べた。その記述は、自身を「負け犬」と呼ぶことのできる心の余裕と諧謔の精神を宿していた。そして、「はいはい、私は負け犬ですよ」と口で言いながら、30代以上・未婚・子ナシの生活をこっそり愛する者同士のみが目配せをしつつ「ほんとは、そうじゃないんだけど、ね」と含み笑いをしあうような、いわば「秘密の愉悅の感覚」も横溢していた。しかし、日本の平均的な読者のリテラシーはそれらの微細な感覚を読み取る水準には達していなかった。当事者からは「負け犬などと呼ばないでほしい」という反発を、非当事者からは「しかじかの条件を備えた女は負け犬である」という揶揄を呼び込むこととなった。

それは、「30代以上・未婚・子ナシ」の生活に楽しみがあるなどとは思ってもよらない当事者の反応であり、そうした生活に女が愉しみを見つけることを許さない非当事者の行動である。「負け犬」批判においても、「草食系男子」批判と同様、男女平等的な（「非典型的」なライフスタイルを女性が手に入れることを肯定する発想はそう形容できる）新しい概念の徹底した無視と貶価が行われていたのである。

第二に、草食系男子否定に対抗するために、彼らは既存の社会システムに「順応」「適応」しているというロジックが使えるということである。「順応」「適応」とは、語り手なりの「草食系男子」を否定するのにも肯定するのにも用いられた概念であった。いずれの論者も草食系男子を現代社会への順応や適応の結果と見なしたうえで、否定派の大前は、日本国外のハードな状況に身を置くことで「草食系男子」を脱することを説き、宮台は「草食化」を「マズい展開」と呼び、危機感をつのらせた。

一方、草食系男子に肯定的な福岡は、彼らを現代社会への「順応」の結果とする見方を否定派と同じくしながら、「草食化」を「生き残りのための変化」と呼んだ。高橋は大前とは違い、日本社会こそがハードな環境なのであり、そこをサバイブするだけの「智慧」を備えている者として草食系男子を位置づけた。

「順応」「適応」概念は、草食系男子否定に対抗できる可能性を孕んでいる。事実、福岡はこの概念を動員しながら、草食系男子に否定的な渡辺を説き伏せたのであった。否定派も用いる概念であることから、両刃の剣であり、この概念の使用に常に「勝機」があるわけではない。しかし、前提の置き方（時間のスパンを大前のように子どもの学齢期に相当する数年単位でとるか、福岡のように生命の歴史に相当する億単位でとるか、所与の環境を大前のよ

「草食系男子」はなぜ蔑称化したのか

うに生ぬるいと見るか、高橋のようにハードと見るか)によって、草食系男子の蔑称化を食い止める可能性が示唆された。

今後の課題としては、資料の渉猟範囲を広げることが挙げられる。今回の対象は2009年刊の雑誌記事に限定したが、2010年以降、現在に至るまで草食系男子をめぐる言説は語られつつけている。これらの言説を辿る作業により、草食系男子をめぐる言説史がより盤石なものとなる。

また、草食系男子を否定する言説だけでなく、深澤が述べていない観点から称揚する言説についても見ていくことが挙げられる。深澤は『平成男子図鑑 リスペクト男子としらふ男子』の草食男子の説明で、その消費行動については言及していない。しかしながら、巷の言説では、草食系男子がクルマを買わず、酒も飲まないかわりに、身なりに気をつかい、コスメを購入し、スイーツを好むことなどが指摘され(牛窪2009, 『DIME』2009年8月18日・9月1日合併)、新たな男性向けマーケットの担い手として肯定的に描写されている(冒頭に引用したメトロセクシュアルはまさにそうした「女性的な」消費行動によって特徴づけられていたのだった)。言説の「伝言ゲーム」の過程でどのようにして草食系男子が「新しい消費行動をする人たち」になっていったのかを検証し、メトロセクシュアル言説との異同を分析するのは、ポスト近代における男性像の変容の観点から意味のある作業だと思うわれる。

注

- 1) 本文に列挙したもの以外に社会学者が書いた論考として片桐2009があるが、先行研究としては扱わなかった。エッセイという形式を理由に扱わなかったわけではない。その内容が理由である。片桐は、男子が女子にたいして「色っぽいなあ」と口に出したり、3秒以上見つめると「セクハラ」になり、告白して断られた場合に再チャレンジをすると「ストーカー」と呼ばれたりする世相を否定し、「草食系男子」を生み出す社会として位置づける。そして、「こんな状況ではまじめな(というか普通の)男の子たちが恋をしにくいのは、当然です。私にはこの状況はよい状態だとは思えません(たぶん、男の子だけでなく、女の子にとっても)」と記す(99-100)。逆に言えば、親しくもない男性から女性が性的な視線で見られたり、関心のない男性から一方的に好意をぶつけられたりしても女性が忍従せねばならない状況が、片桐から見た若い男女にとっての「よい状態」である。こうした性差別と偏見に満ちた放談は先行“研究”というよりは、歴史的な一次資料として分析の対象にするのが適切である(如上の言説が大学紀要に掲載されるという事態も含め)。ただし、今回は一次資料を雑誌言説に限定したため、本文では扱わなかった。
- 2) 原文の改行は削除した。以下の引用文も同様。
- 3) 「変化に対応できた者が生き残る、という主張をダーウィンが行なった」という言説が流布しているが、これは根拠のない俗説であると日本人間行動進化学会が声明を発表している。ダーウィンの著した文献にこのような記述はないこと、また、生物の進化のありようから、人間の

行動や社会がいかにあるべきかを主張することは、論理的な誤りであることが指摘されている。日本人間行動進化学会 2020 参照。

- 4) この鼎談は、次のようなやりとりで締めくくられている。「福岡 草食は草食でいいんです。しばらくこれでやってみましょうよ (笑)。／中村 それは男子的にもちょっと面白いんじゃないですか。嫁に行く人生、みたいなの。／福岡 それで上手く行かないなと思ったら『欲情の作法』に立ち返って、ホテルを上階から降りてみる (笑)。／渡辺 ありがとう、それ、かなり気に入ってるみたいだね (笑)」。「ホテルを上階から降りてみる」は渡辺が『欲情の作法』に記していた、男性は上階のバーで女性を口説いてからエレベーターで下って、部屋に誘えというアドバイスのことである。対立する意見の持ち主を自分側になびかせながら、なおかつ相手へのリップサービスを欠かさない福岡の語りそのものが「順応」の実例を見るようで、瞠目する。
- 5) 自然科学分野の学説を子細に分析したジョルダン＝ヤングとカルカジスの最近の研究によれば、テストステロンが「攻撃欲」あるいは男性性の源になるという「常識」は社会的に作られたものであり、科学的に立証されたものではない。Jordan-Young and Karkazis 2019 参照。
- 6) 男性がケア労働＝家事労働をすることへの忌避感「経済的不合理性」を根拠に表明されることもある。公認会計士の柴山政行は、弁当づくりをする年収 500 万円の草食系男子は 30 分で 2367 円の時給をムダにしているとして、彼らの弁当づくりが収支に見合わないを否定する。そして「いっそのこと、それを売ってビジネスをしたらどうだろう」と提案する。その過程でビジネスのセンスが身に付くのだという。この提案がどこまで本気なのかは不明だが、従来どおり会社に勤務しながら事業化する場合、睡眠時間や趣味の時間を削るのでないならば、副業である弁当事業にかかる時間ぶん、再生産労働時間（自分の健康を維持するための食事を作ったり、快適に過ごせるよう部屋の掃除をしたり、外に出ても恥ずかしくないよう服の洗濯をするなどの家事時間）が削られ、これまで自分でしていた再生産労働を誰かに委ねる必要が出てくるだろう。これを妻や母親に無償でやらせるなら、彼女らの労力や生活時間を奪うことになる。有償家事サービスに委ねるのであれば、弁当事業でそれなりの利益を出さねばならない。だが、副業をそこまでの規模に拡大させることは多くの人にとっては難しい。いずれにせよ柴山の議論は、再生産労働にまつわる労力／金銭的／時間的コストを無視してはじめて可能になる非現実的なものである。再生産労働のコストを無視できる精神と「ケア労働は女性にしてみたら当たり前」という宮台的な精神とは同根のものである。

参考文献

- アルテイシア 2009 『草食系男子に恋すれば』メディアファクトリー
- 牛窪恵 2008 『草食系男子「お嬢マン」が日本を変える』講談社
- 2009 『草食系男子の取扱説明書』ビジネス社
- 内田樹 2009 「ほんとうは恐ろしい「草食系男子」」『新潮 45』28 卷 11 号、92-9 頁
- 大前研一 2009 「世界に飛躍する「人間力」の時代 草食系男子を叩き直すには「国民皆留学制度」しかない」『サピオ』9 月 30 日、43-5 頁
- 片桐新自 2009 「研究ノート 社会学的エッセイ 時代を読む」『関西大学社会学部紀要』41 卷、83-114 頁

「草食系男子」はなぜ蔑称化したのか

- 北上次郎 2009 「男の背中 草食系男子が増えると女性も大変かと……」『Men's Ex』9月号, 153頁
- 熊谷圭知 2010 「草食系男子, オタク, ネオ (プチ) ナショナリスト 変容する日本の男性性と地理的想像力の行方」『人文地理学会大会 研究発表要旨』2010年度, 56-56頁
- 倉田真由美 2009 「フリドラ男 「草食系男子」が増殖中! でも私は断然“肉食派”」『週刊朝日』3月13日, 49頁
- 酒井順子 2003 『負け犬の遠吠え』講談社
- 桜木ピロコ 2009 『肉食系女子の恋愛学 彼女たちはいかに草食系男子を食いまくるのか』徳間書店
- 佐藤優 2009 「“ラスプーチン” 佐藤優のセカイを見破る読書術」『週刊プレイボーイ』4月6日, 68-9頁
- 白河桃子 2009 「日本の結婚難の解消は草食系男子の増加にあり!」『サイゾー』2009年1月, 49頁
- 柴山政行 2009 「草食系男子 いっそのこと弁当を売ってGDPアップに貢献」『プレジデント』9月14日, 99頁
- 草食系男子研究会 2009 『うわさの草食系男子』ゴマブックス
- 高橋源一郎 2009 「おじさんは白馬に乗って 人は彼らを「草食系男子」と呼ぶ」『週刊現代』3月21日, 50-1頁
- 日経ビジネスオンライン 2009 「「草食男子」の男らしさとは? ——“据え膳”を食わない男子たち」(2018年10月13日アクセス, <https://business.nikkeibp.co.jp/article/topics/20090224/187180/?P=1>)
- 日本人間行動進化学会 2020 「「ダーウィンの進化論」に関して流布する言説についての声明」(2020年8月16日アクセス, https://www.hbesj.org/wp/wp-content/uploads/2020/06/HBES-J_announcement_20200627.pdf)
- 日高優・三好康代・山下輝美・横田まき子・村上昭史・湯浅英幸・大久保智生 2015 「現代の青年における「草食系男子」の増加言説の検討: 恋愛に対する態度に注目して」『香川大学教育学部研究報告』第1部, 144号, 1-14頁
- 深澤真紀 2007 『平成男子図鑑 リスペクト男子としらふ男子』日経BP社
- 2009 『草食男子世代 平成男子図鑑』光文社
- 2009 「あらためて, 草食男子とは何者か? 「草食男子」への疑問に答えます【1】」(2018年10月13日アクセス, <https://www.nikkeibp.co.jp/article/nba/20091208/199825/>)
- 2019 「「草食男子」から考える日本近現代史」『現代思想』47巻2号, 45-57頁
- 松岡律 2012a 「草食系男子をめぐる社会学的考察 メディアが煽るジェンダーカオス」(1) 『人権21・調査と研究』219号, 26-31頁
- 2012b 「草食系男子をめぐる社会学的考察 メディアが煽るジェンダーカオス」(2) 『人権21・調査と研究』220号, 54-9頁
- 宮台真司 2009 「草食系男子と孤独死を増殖させる共同体なき「底抜けの世界」」『サピオ』8月19・26日合併, 102-3頁
- 森岡正博 2008 『草食系男子の恋愛学』メディアファクトリー
- 2009 『最後の恋は草食系男子が持ってくる』マガジンハウス

- 渡辺淳一 2009 「あとの祭り 草食系男子論」 その一 『週刊新潮』 5月28日号, 60-1頁
- 渡辺淳一 2009 「あとの祭り 草食系男子論」 その二 『週刊新潮』 6月4日号, 56-7頁
- ・中村うさぎ・福岡伸一 2009 「緊急座談会「草食系男子」よ欲情せよ!」 『週刊文春』 7月14日, 129-32頁
- Coad, David, 2008, *"The Metrosexual: Gender, Sexuality, and Sport,"* Albany: State University of New York Press.
- Jordan-Young, Rebecca M. and Katrina Karkazis, 2019, *"Testosterone: An Unauthorized Biography,"* Cambridge: Harvard University Press.
- Mulvey, Laura, 1975 → 1992, "Visual Pleasure and Narrative Cinema," Screen ed., *The Sexual Subject: A Screen Reader in Sexuality*, London and New York: Routledge, 22-34.
- Rose, Michael S., 2003, "Metro Sexual Goes America," Cruxnews. com, Retrieved 16 September 2003, <http://www.cruxnews.org/rose-metrosexual.html> (cited in Coad 2008: 32-4).

追記：本研究は2018年度個人研究助成費（受給番号18-14）の成果である。